

私は10年以上、いつでも欠かすことなく身に付けていたものがありました。それは、あるお寺の交通安全のお守りでした。高校生の時、イキがって首から下げたのがはじまりでした。

その後、私はオートバイで交通事故に合い、一命は取り止めたものの、足などの骨を折り、手術を受けました。その中で一番驚いたのは、胸にあるお守りが割れていたことでした。「身代わり札が守ってくれたのね。」救急車で病院に担ぎ込まれた時に誰かが言った言葉が頭に入って、それ以来、それを神様と信じて、肌身離さずはずすことはありませんでした。

不思議な導きの中で教会に通う機会が与えられ、聖書を読み始めると、天地万物を造られた方が本当の神様であり、罪ある人のためイエス・キリストが十字架にかかられたことがわかってきました。そして、自分が罪人であること、だからこそイエス・キリストの救いが必要なことが理解できました。しかし、信じたくても、決心には至りませんでした。「目に見えず触れもしないものなど作り話だ。」と自分で自分に言い聞かせていたのです。また、罪の清算をして新しい人生を歩みたいと願いつつも、何者かに後ろ髪を引かれるのでした。なによりも、お札を首からはずすことなど出来ませんでした。なぜなら「身代わり札をはずしたら何が私を守ってくれるのか。」という死への恐れがあったからです。

ところが、ある夜、聖書を読んでいた時のことです。復活のイエス・キリストをこの目で見なければ信じないとトマスが疑う場面で、私は同感し応援するような気持ちでいました。そして、このトマスに対してイエス・キリストが何と答えるのかと興味津々でした。その時、次の聖書のみことばが私の心に飛び込んで来たのです。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」ヨハネによる福音書第20章27節、「見ずに信じる者は幸いです。」20章29節。

疑いがすべて晴れたのではありませんでした。けれども、疑う心を恥ずかしい、いや、罪だとしめされました。それは本当の神様がおられるのに、まだ疑っている自分を知らされたからです。そして、この罪深い者が今もなお生かされているのはイエス・キリストの十字架のゆえにだと理解出来たからです。堰を切ったように涙があふれ、その時私はイエス・キリストをただ一人、私の罪からの救い主と信じる決心をしました。私にとって、イエス・キリストこそ目には見えなくてもいつも共にいる神、かたちは無くても決して壊れることない永遠の方、罪の身代わりの救い主です。

イエス・キリストを心に迎えてからは、お守りの他にも仏滅や厄年、家の方角や名前の画数などの捕らわれや恐れがなくなりました。むしろそれらのものから解放され平安と自由が与えられました。また、振り返ってみると、以前は、死とさばきの恐れからの信心でしたが、今は罪の赦しと永遠の命の感謝と喜びからの信仰に変えられています。かつて私は人間を超えたものを求めて座禅を組んだこともありました。新しい生き方を目指して髪を切ったこともありました。罪を償うかのようにボランティアに精を出したこともありました。その時は無心になれたり気分が入れ替わったり人助けをした満足感がありましたが、だからと言って何も変わらず、むしろ虚しさになって返ってきました。

ただただ、神の御前に悔い改めて、イエス・キリストを個人的救い主と信じた時から神様とともに歩む私の新しい人生が始まりました。神様の愛と恵みに心から感謝します。